

# 中国におけるクラウドツーリズム研究序説

—上海観光フェスティバルの事例を中心に—

部 健斐

人間文化研究科地域文化学専攻

## はじめに

クラウドツーリズムとは、「クラウドコンピューティング」と「観光」を融合させた造語であり、OTA (Online Travel Agent) やライブ配信、ショート動画といったプラットフォームを通して疑似観光を楽しむことを意味する。中国では、クラウドツーリズムを「雲旅游」や「智慧旅游」などと呼んでいる。

中国において、クラウドツーリズムは全く新しい概念ではない。インターネット時代の中で観光地側が観光スポットの情報をネットユーザーに紹介して興味を引き出すという誘客策として、2010年頃からあった概念である。中国でクラウドツーリズムが話題になったのは、2011～2015年にかけてのことであった。インターネット上で話題になることで、それまで見向きもされなかった場所が、急に人の押し寄せる観光スポットになることがあるなど、地域経済に貢献するという効果も見られた。しかし、このような新たな観光形態の価値や概念についての理解の不足に加え、当時は5G (第5世代移動通信システム) やAR (拡張現実)、VR (仮想現実) などの技術が整備されていない状況にあった。その結果、クラウドツーリズムはただの観光方式の一ツールとして利用されてしまい、それに関する議論も下火になってしまった。

ところが、新型コロナウイルス感染症 (以下、COVID-19) の拡大によって、状況が一変した。COVID-19の影響により、旅行者が激減していることに対する打開策として、政府やOTA、旅行会社などが、クラウドツーリズムの可能性を模索しはじめたのである。それに伴って、クラウドツーリズムについての議論も再度活発化することとなった。

この背景には、中国の観光業界についての現状もある。中国では、著しい経済成長の結果、国民一人当たりが占める「教育・文化・娯楽」に対する一人当たりの消費支出の割合が拡大した。その結果、中国文化観光部が公表した『2019年の観光市場の基本的な状況』によれば、同年の国内観光客数

は延べ60億600万人、インバウンド、アウトバウンドの観光客の総数も延べ3億人にまで達し、年間の総観光収入は6兆6300億元となった。また、中国の観光業がGDPへの総合貢献額は10兆9400億元で、GDPに占める観光収入の割合は11.05%となった。観光業務に従事する直接就業者数は、2825万人に急増し、間接就業者も含めると全部で7987万人にまで達した。これは、全国の就業者総人口の10.31%を占める数に当たる。そのため、COVID-19が中国の観光業界にもたらした影響は計り知れないものであった。

こうした状況を受けて、国務院の李克強総理は2020年11月18日に国務院常務会議を主宰・招集し、COVID-19の常態化の下での旅行業の発展を促進するために、「インターネット+観光」の発展を支持することを決めた (中国政府網 2020)。具体的には、クラウドツーリズムの発展を支援し、電子地図や音声ガイドなどのサービスを普及させ、観光スポットのデジタル化を加速させると同時に、各観光地にクラウドツーリズムの取り組みを奨励するとした。このような文脈のもとで、本稿でも取り上げる「上海観光フェスティバル」のようなクラウドツーリズムを取り入れた観光イベントが各地で実施されるようになった。

こうした状況の変化は、クラウドツーリズムの研究にも変化をもたらすこととなる。すなわち、これまでのクラウドツーリズムの研究は、クラウドツーリズムをCOVID-19の流行中の一時的な道具にすぎないとみなす「ツール派」と、様々なリスクに対応できるため、今後も観光の一形態と定着していくとする「イノベーション派」の間の空中戦的議論が主流だった。しかし、具体的な事例の増加によって、実際の事例に即してクラウドツーリズムとはいかなる観光形態なのかについて検討することが可能となったのである。

そこで本稿では、中国上海市で2021年9月17日からの20日間にわたって開催された中国で最大かつ最も影響力のある大規模イベントである「第32

回上海観光フェスティバル」を事例に取り上げ、中国の新しい観光形態であるクラウドツーリズムの実態を調査し、クラウドツーリズムとはいかなる観光であるのか検討するための手がかりの一つを提示することを目的とする。

なお、同イベントは、現地を訪れる観光客のためだけのイベントではなく、クラウドツーリズムの方法を用いて現地に来られない客にも対応する、ハイブリッド式で行われたイベントであった。中央広播電視総台(中国の国営放送機構)の傘下の「央広網」によれば、「今回の20日間のイベントで、現地へ訪れた観光客数は延べ2642万2800人で、クラウドツーリズムの総再生回数は11億7000万回、旅行消費額は約360億8000万元に達した」(央広網 2021)とのことで、同イベントが大規模なクラウドツーリズムのイベントであったことがわかる。以上を踏まえて、本稿では「第32回上海観光フェスティバル」を研究対象とすることとした。

## 1. 中国におけるクラウドツーリズムに関する先行研究

### 1-1. COVID-19以前(2011～2015年)

中国国内では、2011年からクラウドツーリズムについての議論が活発に行われてきた。中国の総合的な学術論文検索ツール「知網」を使い、「雲旅游」や「智慧旅游」というキーワードで単純検索すると、学術論文ではないが、関連するいくつかの学術雑誌に掲載されたエッセイがヒットする。

例えば、魏宇<sup>1</sup>は、はじめてクラウドツーリズムという概念を提示した。彼は、雲旅游とは、クラウドコンピューティングの技術を用いて、「オンラインとオフライン」、「仮想と現実」を互いに融合した旅行のプランであると定義した。クラウドツーリズムは、観光行動による知覚リスク(消費者が観光商品やサービスを購入する際に持つ不安)を低減することができることに加えて、顧客の所在地と観光地との間の情報障壁を打ち破り、空間的・時間的な制約を突破することもできるとした(魏 2011)。

こうした概念を踏まえて、クラウドツーリズムを観光業界に応用するための議論が開始された。例えば、郭靖・郝素<sup>2</sup>は、「農家楽」と呼ばれる鄉村観光をクラウドツーリズムに融合することを提唱し、クラウドツーリズムの出現は農村観光をアップグレードするための新しい方法を提供することを示唆した

(郭・郝 2012)。それ以外にも、顔敏<sup>3</sup>は、森林旅行(エコツーリズム)をクラウドツーリズムに融合することで、「冒険」、「現地調査」、「研究」、「教育」、「娯楽」などを目的とする様々な観光コンテンツを開発することができるため、今後の期待が高まっていると論じた(顔 2015)。

### 1-2. COVID-19以降(2020年～現時点)

その後、クラウドツーリズムについての議論は一時停滞した。しかし、2020年にCOVID-19の影響により中国では旅行者数が激減し、観光業が深刻な打撃を受けたことから、観光産業を支えるための対応策としてのクラウドツーリズムに再び脚光が当たることとなった。

クラウドツーリズムについての議論は、クラウドツーリズムに対して否定的な「ツール」派と肯定的な「イノベーション」派に分類できる。まず、「ツール派」の議論を二つ取り上げる。一つは、陳虎・郭飛・王穎超<sup>4</sup>が行った、COVID-19対策期間の前後のクラウドツーリズムに対する消費者の需要分析である。彼らは、移動制限などによって、現状は消費者がクラウドツーリズムに依存しているといえるが、COVID-19が終息した後消費者の心理は「需要の満足」から「観光コンテンツの充実」に変化すると推測しており、そうなった場合、クラウドツーリズムは、ただ観光スポットに関連する知識や文化などの情報を収集する1手段にすぎなくなるという(陳・郭・王 2020)。

もう一つは、王宇<sup>5</sup>の研究である。王は、クラウドツーリズムは「技術の進歩」と「COVID-19の影響」という2つの要因から市場化したと推測し、COVID-19以降、クラウドツーリズムを従来の観光形態の代わりにするのは不可能であるため、クラウドツーリズムは、観光地の「ブランディング計画」を推進する広告戦略の1つにすぎなくなると主張している(王宇 2020)。

こうした「ツール」派の議論と異なるものとして、「イノベーション」派の索玲娟・王元倫<sup>6</sup>の議論がある。すなわち、産業革命以来、生産力の発展のためにイノベーションが必要とされてきたという歴史がある。観光業もそれと同じで、COVID-19の流行が進む中で、観光地側が自然災害や人為的な災害(テロや疫病流行など)への対応力を高めるためにとれる唯一の方法は、イノベーションとしてのク

クラウドツーリズムであるという(索・王 2020)。

以上のような、クラウドツーリズムのあり方が議論される一方で、クラウドツーリズムの問題点についての議論も活発化してきている。

例えば、王思佳<sup>7</sup>は、三つの問題点を指摘している。一つ目は、巨額の初期投資に対して、企業および個人配信者がその投資をどのように回収するかという問題である。クラウドツーリズムを行うためには、4Kビデオカメラや空撮用ドローンといった撮影機材が必須となるからだ。二つ目は、クラウドツーリズムの導入は、従来の観光業に負の影響を与える可能性があるという問題である。具体的には、COVID-19期間中に多くのネットユーザーがクラウドツーリズムを通していくつかの観光地を楽しんだ場合、COVID-19以降、その観光地への観光意欲が低くなる可能性が高いという。なぜなら、1回体験したものをもう一度体験したいという人は少なく、人間としては新しい事物を追求するのが当然なことだからだという。言い換えれば、クラウドツーリズムは観光産業の回復を促進するどころか、現地への観光活動を抑制する可能性があるとした。三つ目は、政府機関や企業側などが「観光活動」という言葉を再定義する必要があるという問題である。この再定義が行われない場合、クラウドツーリズムの参加者(ネットユーザー)は観光客の数として数えることができるのか、それによってもたらされる経済的利益は観光収入として数えられるのかといったことに答えられないと指摘した(王思佳 2020)。

王惠敏・尚文媛・馬擘寧<sup>8</sup>は、中国西安市の観光客253名を対象に、インタビューとアンケートによる実態調査を行った。調査結果を分析すると、クラウドツーリズムの導入を通じてネットユーザーの西安市への観光意欲は高まったが、実際に行ってみると「思っていたのとは違った」と感じる事が多く、そこからクラウドツーリズムの内容を「誇大宣伝」であると感じる現象が生じていることがわかった。そして、それこそが観光客に不満を引き起こす重大な要因であることを突き止めた。その上で、観光客の満足度を維持するためには、事前の期待(クラウドツーリズムの視聴・参加)と、結果(現地旅行)としての認識を一致させることが重要であると指摘した。つまり、現在のクラウドツーリズムは、旅行地の実態や特産品、サービスなどについて、真実ではない内容を伝えて、実際よりも素晴らしいも

のをネットユーザーに提示してしまう「誇大宣伝」の問題がある(王・尚・馬 2021)。

加えて、嚴羽爽・頼啓福・傅慶隆・黄傑龍<sup>9</sup>は、ネットユーザー778人を調査対象者としてWeb調査を行い、頻度分析と2つのロジスティック回帰モデルを用いて、COVID-19以降の消費者に対して「森林・クラウドツーリズム」への好みと影響要因を分析することで、クラウドツーリズムの問題点を指摘している。「森林・クラウドツーリズム」とは、クラウド上で森林または、その周辺地域に存在する自然環境資源や生活文化資源を映像化したコンテンツを楽しめる観光形態である。分析によれば、都会の環境を映像化するより、森林などの「非日常生活」を映像化し、コンテンツにするほうがネットユーザーには好まれるという。また、半数以上(53.6%)の消費者が21～40時間をかけてクラウド上で「森林・クラウドツーリズム」に関連する映像を視聴することが望ましいと明らかにしたが、既存のプラットフォームは時間制限により5分以内の短い動画を流すことが一般的である。つまり、クラウドツーリズムの「放送時間」は適当ではないという問題点がある(嚴・頼・傅・黄 2021)。

呉月佳<sup>10</sup>は、陝西省商洛市山陽県におけるクラウドツーリズムの導入事例から、クラウドツーリズムはその県の観光発展に役立つのかどうかについて検討した。具体的には、商洛市政府が、市(県)文化観光局、中国聯合通信(中国政府によって設立された通信事業者)などと連携して、2019年12月17日に「商洛市クラウドツーリズム・ビッグデータ・センター」を開設した。同センターは、2020年4月9日に商洛市政府と文化観光局や周辺の各県政府と連携することで、「2020陝西省商洛文化観光イベント」をクラウド上で共同開催することとなった。そのイベントでは、山陽県副県長が司会者を務めることとなった。しかし、プロのインフルエンサーではない副県長が未熟な説明やプロモーションをするだけでは、ネットユーザーに旅行商品を購入してもらったり、現地へ誘客したりすることはほとんどできなかった。また、観光の専門家ではないがゆえに、観光地側の歴史、文化などの知識が不足していたため、ライブ配信の際にネットユーザーと双方向の交流を図ることが難しかったことが明らかになった。すなわち、クラウドツーリズムは、誰でも配信できるわけではなく、一定程度の観光専門知識を身

につけることが不可欠であるが、そうした人材が不足しているという問題があると示した(呉 2021)。

以上のような、クラウドツーリズムの事例研究から、様々な問題点が明らかになっている。しかし、そもそもクラウドツーリズムとはいかなる観光なのか、その基本構成や特性、仕組みはいかなるものなのかという点については、ほとんど検討されていない。

そこで、以下では、先行研究を踏まえた上で、「第32回上海観光フェスティバル」の事例の検討を通じて、クラウドツーリズムの基本構成や特性、仕組みなどを把握していく。

## 2. 上海観光フェスティバルについて

### 2-1. 概要

「上海観光フェスティバル」は、1990年10月6日に開催された「上海黄浦観光フェスティバル」に端を発し、1996年の「第7回」の際に現在の名前に変更された。それ以来、毎年9月の土曜日から20日間前後にわたって行われるようになった大規模な観光イベントである。この観光イベントは上海市文化観光局と上海市商務委員会の共催で開催されており、毎回、それぞれのテーマを設定することで、着地型観光を積極的に推進している。つまり、これまでの「上海観光フェスティバル」は、上海市民や国内外の観光客を現地誘致し、上海ならではの文化、景色、飲食といったものを体験してもらうような現地開催型イベントだった。しかし、COVID-19の影響により、これまで通りのイベント運営が不可能になった。そこで2021年の「第32回」から導入されたのが、クラウドツーリズムであった。

本稿で取り上げるのは、2021年9月17日から始まった「第32回上海観光フェスティバル」である。今年のテーマは「読める建築、都市をミニトリップ」であった。上海市文化観光局局长の方氏が、9月17日に「私たちは今回の観光フェスティバルを通じて、上海市の文化や風景、建築物などをブランド化し、全力で観光地として発展させる。それ以外には、こうした活動の開催を機に、クラウドツーリズムの方式で、市民や観光客に近距離で上海市での生活を体験してもらう」(上海市文化観光局 2021)と宣言したように、上海市文化観光局は、このテーマに沿って、クラウド上で国内外の視聴者に、上海市の歴史や文化、建築物から上海という都市の発展

を理解してもらうためのコンテンツを多数用意した。

### 2-2. 上海観光フェスティバルにおけるクラウドツーリズムの取組み

今回のイベントは、「通常観光」と「クラウドツーリズム」のハイブリッド方式で実施された。「通常観光」としての取組みは、10月6日までの期間中に、COVID-19の影響で「観光地の営業時間の短縮」や「SNS アプリによるキャンペーンの拡散」、「予約、オフピーク、人数制限による人の流れの誘導」などのような厳格な感染対策を守りながら開催された。イベント開催中に、上海市内82カ所の文化観光施設の入場料を半額にするほか、現地の歴史的建造物に専用のQRコードを設置して関連情報を提供する「読める建築」プロジェクトなどを文化観光キャンペーンの一連の施策として行い、街中でムードを盛り上げた。また、専用の観光バスもイベント期間中に運行された。

一方で、「クラウドツーリズム」としての取組みとしては、まず、上海市内150カ所以上の歴史的な建造物についての文化や背景、物語などを、テレビやラジオなど様々なプラットフォームで12時間にわたってライブ配信し、紹介したことが挙げられる。それ以外には、上海市文化観光局、上海市放送局、上海市文物局という3つの公的な機関がSNSアプリ「WeChat(微信)」と連携し、「玩転申城(申城で楽しめる)」という「WeChat 公式アカウント」を開設した。専用のQRコードでは、クラウド上で保有している観光情報を現地への観光客または、ネットユーザーに提供している。これは実際に現地に訪れる観光客向けの機能であるが、これらの機能を利用して、COVID-19の終息後に個人旅行を計画する際にも使うことができるという意味で、クラウドツーリズム的な機能といえる。

### 2-3. プラットフォームの役割とクラウドツーリズムの仕組み

クラウドツーリズムを行うためには、多様なプラットフォームが必須である。「第32回上海観光フェスティバル」では、各プラットフォームが重要な役割を果たした。

プラットフォームには、自分が編集したオリジナルな短編動画を他人に共有できる「TikTok(抖音短視頻)」のほか、ビデオ編集・共有アプリの「小紅

書(RED)」や「Kwai(快手)」などのショート動画プラットフォーム、「DouYu(斗魚直播)」、「Huya Live(虎牙直播)」、「bilibili(哔哩哔哩)」などのライブ配信プラットフォームなどがある。多くのユーザーがそれらを利用して、観光やネットショッピングを日々行っている。それ以外にも、「Ctrip(携程)」や「Fliggy(飞猪)」、「Qunar(去哪儿)」、「Tuniu(途牛)」、「Ly(同程)」などのOTAプラットフォームもある。ネットユーザーは、OTAプラットフォームを通して、世界中の「どこからでも」、「24時間いつでも」、観光情報を検索したり、現地のホテルやチケットなどの予約を依頼したりすることができる。

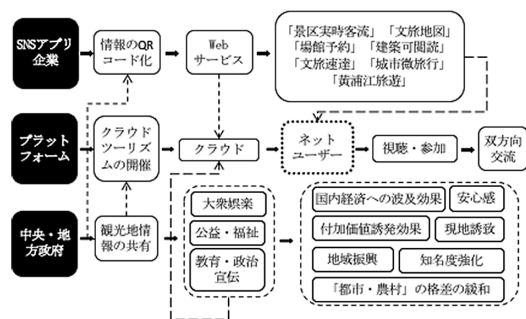


図1 クラウドツーリズムの仕組み 出典：筆者作成

クラウドツーリズムの仕組みを図で示すと、図1のようになる。SNSアプリ企業は、中央および地方政府から得た観光地の情報をQRコード化した上で、現地への旅行者とネットユーザーにWebサービスを提供する。プラットフォームは、クラウドツーリズムを行う基盤であり、アプリケーションをダウンロードすることで、無料で利用できる点が大きな特徴である。プラットフォームには「ショート動画」、「ライブ配信」、「OTA」という3つの種類があり、ネットユーザーが、自分自身のニーズによって自由に選ぶことができる。さらに、プラットフォームを通じて、コメント欄で司会者や他のネットユーザーなどと双方向のコミュニケーションを取ることができる。中央および地方政府は、各自に属する名所旧跡の情報をプラットフォーム側に共有し、大衆娯楽や公益、福祉、教育、政治宣伝などを目的としたクラウドツーリズムを行う。すなわち、利益を追求するのではなく、公益活動を支援する意

味がある。その結果、国内経済への波及効果や国に安心感を与えること、付加価値誘発効果、現地誘致、地域振興、知名度強化、「都市・農村」の格差の緩和にもつながることが期待されている。

## 2-4. 調査の方法

以上の「第32回上海観光フェスティバル」の概要とクラウドツーリズムの仕組みを踏まえて、事例の詳細を確認していく。なお、ここで取り上げているのは、20日程度ある「上海観光フェスティバル」の中の初日(一部)のみのコンテンツである。コンテンツは時系列順で提示してある。なぜ、初日(一部)のみを取り上げたかといえば、30年以上の歴史をもつ「上海観光フェスティバル」が初めてクラウドツーリズムを導入した初日だったこともあり、初日(一部)はその他の時期より注目度が有意に高かったからというのと、初日(一部)のクラウドツーリズムの手法とその他の時期に用いられた手法がかなりの部分重複していたことが挙げられる。つまり、イベントの初日(一部)を詳細に分析することで、「上海観光フェスティバル」が実践したクラウドツーリズムのおおよそを把握できると考えたことが初日(一部)のみを取り上げた理由である。

筆者は、このイベントにリアルタイムで参加したわけではなく、クラウドツーリズムとして「bilibili(哔哩哔哩)」に公開されているコンテンツの視聴を通じた非同期的調査を行った。そのため、観光を提供する側と提供される側のリアルタイムの双方向コミュニケーションについての調査は行っていない。つまり、本稿はクラウドツーリズムという名のもとに新しく提供されたコンテンツの内容にのみ注目した、クラウドツーリズムの基本構成や特性、仕組みの把握にとどまっている。なお、上海市文化観光局から映像の使用許諾は得ている。以上を踏まえて、事例の検討に移る。

## 3. 「第32回上海観光フェスティバル」初日(一部)の事例の調査結果

### 3-1. 松江・方塔

クラウドツーリズムが始まると、まず司会者である雷氏が観光バスから上海の市街地を紹介した(図2)。この観光バスは、現地に訪れる観光客に向けたイベント専用バスである。五・三〇事件記念碑から出発し、外白渡橋駅や城隍廟駅、金陵東路埠



図2 雷氏



図3 観光バスコース

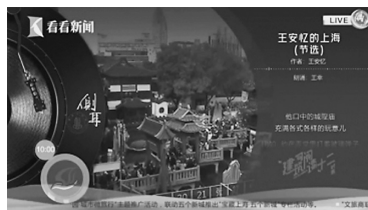


図4 文字写真音声の活用



図5 空中写真



図6 黄氏(左)林氏(右)



図7 王氏

出典：「bilibili 動画共有サイト」, 2021.

(2021年11月16日取得, <https://www.bilibili.com/video/BV1Du411f7hS?p=1>).

頭駅を經由し、東方明珠駅までのルートを進る(図3)。途中、外灘をはじめ、豫園(明代の庭園)、人民広場、歴史博物館、大世界(屋内演劇場)などに止まる。

司会者が乗った観光バスには、ライブ配信機能を持つカメラが用意されており、視聴者はテレビやラジオなどのマス・メディアはもとより、「bilibili(哔哩哔哩)」、「TikTok(抖音短視頻)」などのプラットフォームを通して視聴することができる。なお、動画コンテンツなどには、自動字幕もつけられている(図4)。中国語は基本的に1つの字につき1つの読み方しかないが、例外的に複数の読み方のある字(多音字)も多く存在し、地域によってはある方言しか理解できない人もいるからである。

第1弾のクラウドツーリズムの目的地は、「松江・方塔」である。目的地に移動するまでに、ネットユーザーの参加感を高めるために、ナレーターが王安憶(中国の小説家)の『王安憶の上海(抜粋)』を朗読するとともに、上海に関連する写真や動画を放映した。こうした上海ならではの歴史、文化、物語を通じて、上海に行ったことがない視聴者は、上海という都市のイメージを形成していく。

観光バスが上海松江区中山東路に面している方塔園に到着すると、最初に目を入るのが「松江・方塔(正式名称:興聖教寺塔)」という古い建築である。そのとき同時にカメラ付きの小型ドローンが

撮影した、「松江・方塔」の全体図の映像が流される(図5)。司会者である林氏は、「一つの塔が城にあり、千年の文化を持ち、万種の風情がある」というキャッチフレーズで、「しばらく都市を離れて松江・方塔の魅力を感じよう」と、見ている人に語りかけた。

その後、林氏は観光ガイドの黄氏と合流し、一緒に「松江・方塔」とその周りの環境を詳細に紹介した(図6)。林氏は、現場を案内しながら、「松江・方塔園」に関するより詳細な情報をネットユーザーにリアルタイムで提供するために、上海市松江区博物館の副館長である王氏を招いて、書道作品の解説などを行った(図7)。

### 3-2. 広富林文化遺跡

第1弾のコンテンツが終わると、現地の画面からライブ配信放送室に画面が切り替わった。同時に、鳥瞰図の形で上海市の建築や黄浦江などを立体的にネットユーザーに示すために、AR技術を利用して、実際にある放送室の映像とCGを合成することで、現実の世界に仮想空間を作り出した(図8)。

上海側の記者である許氏が司会者となって、「広富林文化遺跡は上海の根と呼ばれ、海派文化(上海の文化を指す)の本元だといえる」という説明に始まり、広富林文化遺跡がどのような歴史や文化を持つのか紹介した。第1弾のように、カメラ付きの小

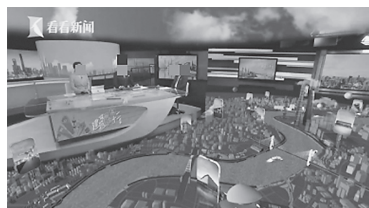


図8 上海の仮装空間



図9 解説の画面



図10 広富林宰相府



図11 曹氏



図12 宝山浄寺



図13 沈氏

出典：「bilibili 動画共有サイト」, 2021.

(2021年11月16日取得, <https://www.bilibili.com/video/BV1Du411f7hS?p=1>).

型ドローンが撮影した映像もあるが、第2弾は第1弾とは異なり、単なる風景画面ではなく、「旅行ガイドの解説の画面」と「空中から撮影した風景」という2つの映像を1画面に提示し、アイキャッチ効果を与えた(図9)。つまり、「司会者の解説の画面」では、司会者と観光ガイドが「人類文明と水の融合」という理念を持つ様々な建築の歴史や文化などを紹介している一方で、「空中から撮影した風景」として、水面に漂う建築を映し出している。その後、司会者と観光ガイドに従って、第2弾の「広富林文化遺跡」を見学した。

「広富林文化遺跡」には大きな円形の建物があり、その外観は稲わらを「山の形」にしたものに似ている。これについて、観光ガイドは、「昔の松江は、天下の穀倉と呼ばれるので、このような建築を建てた」と説明し、付随する「広富林国際文化交流センター」や「松江都市計画発展館」などを水の下に建てるのは、「広富林文化遺跡」を保護するためだと紹介した。

ライブ配信放送室側は、公的な機関からのコンテンツをライブ配信するだけでなく、ネットユーザーに多角的な情報を提供するために、「小紅書<sup>11)</sup>」のプロガーが作成した観光映像作品も放送した。その内容は、再建された「広富林宰相府」という中華風のホテルをとりあげ、その感想や周りの景色などを紹介するというものであった(図10)。「小紅書」の

プロガーの作品が終わると、次にスクリーンに映し出されたのは「龍華広場」に存在している千年の歴史を持つ「龍華塔」で、空中の視点からの映像を配信しながら、記者である王氏が説明を加えた。

ライブ配信放送室側は、見学を目的として上海交通大学の建築文化遺産保護国際研究センターの主任である曹氏を招いて、「広富林文化遺跡」や「龍華塔」、「孔廟」、「宝山浄寺(現称:宝山寺)」などに関する映像を見ながら、古い建築と現代建築の融合や再利用、新たな技術と古代建築の融合などのような専門的な知識をネットユーザーに紹介した(図11)。ここでもネットユーザーに身近に感じてもらうため、「小紅書」のプロガーに掲載された『上海で最も美しい寺院——宝山浄寺』という映像作品を使用した(図12)。その映像作品では、「宝山浄寺は再建後に開放された500年以上の歴史を持つ古刹である。寺内の建物の素晴らしいところは、アフリカの紅花梨の純木構造を採用して建造されたほか、中国国家建築業の最高賞である魯班賞(ルバン賞)も受賞したことだ」という解説がなされた。映像作品が終わると、画面は現地へ移動し、新場古鎮(古い町)文化研究会の名誉会長である沈氏が、世界遺産登録中の「浦東新場古鎮」に再建した橋や建築の構築、風習などをそれぞれ紹介した(図13)。



図14 周氏



図15 李氏



図16 王氏



図17 盧氏



図18 趙氏



図19 現代上海の映像

出典：「bilibili 動画共有サイト」, 2021.

(2021年11月16日取得, <https://www.bilibili.com/video/BV1Du411f7hS?p=1>).

### 3-3. 沈家祠堂

第3弾では、上海の嘉定区に位置し、「市レベル重点文物保护单位<sup>12)</sup>」としての「沈家祠堂」を訪れた。「沈家祠堂」は、1916年に建築家である沈安邦が祖先を祈ったり、沈氏の家族活動を行ったりすることを目的として建造した、中華風と西洋風を融合させた施設である。現在では、芸術的・歴史的な価値などがあるため、観光地化された。

クラウドツーリズムが始まると、まず、記者である周氏が「伝統服」としての「旗袍(チャイナドレス)」を着て登場し、「沈家祠堂」を紹介するという演出がなされた(図14)。

記者が「沈家祠堂」のドアを開けると、目に飛び込んできたのは中国の伝統的な文化と異文化が融合した現代風の廊下であった。廊下の周りには、獅子や犬といった動物や蓮台などのような謎の石造物が配置されていた。次に、上海市江橋鎮の伝統文化を研究する李氏が「沈家祠堂」の由来を説明した(図15)。その後、記者は「沈家祠堂」に住んでいる住民である王氏を招いて、「沈家祠堂」についての楽しい思い出を語った(図16)。

「沈家祠堂」を出ると、画面はもう1つの観光地である「真如古鎮」に移った。「真如古鎮」は、上海市内に位置し、1320年に建造された700年の歴史を持つ古鎮である。画面の中に、「真如古鎮」に関わる人文、歴史、軍事、交通という4つの要素を含

める写真や映像などを配信した。配信中には、「真如古鎮」で20年以上生活している盧氏と、元真如小学校の教師である趙氏が、上海方言でそれぞれ「真如古鎮」の歴史、祭り、貿易、食文化などを紹介した(図17、18)。

第3弾のクラウドツーリズムの終盤には、往年の「上海観光フェスティバル」の映像が流れてきた。その映像が突然現代上海の映像に切り替えられる演出は、観光客にタイムスリップしたかのような気分を味わわせるものとなっている(図19)。

### 3-4. 上海油罐芸術中心

第4弾の目的地は、上海市徐匯区に位置する「上海油罐芸術中心」である。「上海油罐芸術中心」は、1966年に廃止された旧龍華空港内で使われていた5つの航空機の燃油タンクを再利用することで建造された建築群である。建築群は、5つの建物を中心に、複数の展示スペース、公園、書店、教育センター、レストランなどが点在する。

クラウドツーリズムが始まると、ネットユーザーに位置情報を提供するために、仮想空間の上空を鳥が飛び越えながら、観光地の地理空間情報をCGの形で示した(図20)。画面がライブ配信放送室に戻ると、司会者である舒氏が同じく司会者である高氏に『読める建築』という本をプレゼントするシーンが映し出された。高氏は、シットコムのような調子





図20 架空の画面



図21 舒氏(左)高氏(右)



図22 陳氏(左)岱川博士(右)

出典：「bilibili 動画共有サイト」, 2021.

(2021年11月16日取得, <https://www.bilibili.com/video/BV1Du411f7hS?p=1>).

で今回のイベントのテーマである「読める建築、都市をミニトリップ」を詳しく説明した。その後、画面は取材地である「上海油罐芸術中心」に移った(図21)。

観光地側の記者である陳氏に中継をつなぐと、陳氏は「上海油罐芸術中心は、上海文化観光局、嘉定区人民政府、「小红书アプリ」による共同主催の芸術鑑賞コースの起点である」と説明し、「人々と社会」、「現代美術」、「都市」、そして「自然との繋がり」を育むことを目的とした「上海油罐芸術中心」は、上海の芸術と文化活動の新たな中心地となっていると紹介した。そして、旅行プロガーである岱川(イギリス人、天文・物理学博士)を特別ゲストとして招いて、環境保全やサステナブルの視点から芸術と都市のつながりを評論した(図22)。

### 3-5. 外灘万国博覧建築群

第5弾は、外灘をめぐるクラウドツーリズムであった。外灘は、上海市の中心である黄浦区にある黄浦江の畔に位置し、レンガ造りの洋風建築を囲む、異国情緒が残る上海のシンボリックな名所の1つである。

クラウドツーリズムが始まると、第1弾のようにナレーターが宋琳(現代詩人)の『外灘のキス』を朗読しながら、上海の街並みや、川筋、建築などを映し出す動画が流れた。次に、第1弾でも登場した「観光バス」が外灘に到着し、第1弾と同じ司会者である雷氏と同济大学人文学院准教授である湯氏が画面に現れた(図23)。観光バスが移動していくなかで、司会者と湯氏は浦東の「外灘万国博覧建築群」と呼ばれる26棟の建築の一部を詳細に紹介した。

観光バスでの移動途中に、現地に訪れて黄浦江の遊歩道を楽しんでいる観光客に出会ったため、司会者は、「皆さん、こんにちは！」と挨拶してから、

黄浦江を挟んで対岸(陸家嘴を指す)の建築群を紹介し始めた(図24)。上海市浦東で建てられた古い建築と比較すると、黄浦江を挟んで対岸にある超高層建築は、「改革開放政策」以来の中国の発展ぶりを感じさせる。その光景をみて司会者は、「まるで現在と過去の対話のようだ」という感嘆をもらしていた(図25)。

次に画面に現れたのは、外灘の建築の中でも目を引く「和平飯店(Peace Hotel)」という緑の三角屋根の建物である。別の司会者である趙氏と中国作家協会会員・上海作家協会理事である馬氏が、「和平飯店」の中に入っていき、「和平飯店博物館」や「龍鳳庁」(レストラン)、「老爵士吧」(Old Jazz Bar)などを見学しつつ、歴史と物語をそれぞれ語った(図26)。具体的には、「和平飯店博物館」で展覧された旧写真(1927年前後)や食器などを見ることを通じて、「和平飯店」の歴史を学んだ(図27)。また、龍鳳庁で馬氏が「昔、ある新婚夫婦が和平飯店の龍鳳庁で結婚式を行うことで、様々な感動を味わったため、その夫婦が当時使用したメニューが今でもまだ残っている」という物語を語った(図28)。シックな内装がオールド上海を感じさせる「老爵士吧」の店内は、現代風なフロアとオールド上海風のフロアとに分かれており、時には「夜上海(1946年発表の中国の楽曲)」のような古い音楽に合わせた社交ダンスの時間もある。店内を演出する平均年齢75歳というオールドジャズマンたちのリーダーである肖氏は、「老爵士吧」の現状を(図29)、和平飯店の副社長である陳氏は、古いホテルを再建した際の計画や「東洋と西洋の融合」の理念、「世界で最も贅沢なホテル」というコンテンツを紹介した(図30)。

最後に、司会者である趙氏が外灘の川辺で、現在の浦東の夜景を様々な視点から眺めつつ、「和平飯



図23 湯氏と雷氏



図24 現地の観光客



図25 黄浦江対岸



図26 趙氏と馬氏



図27 和平飯店博物館



図28 古いメニュー



図29 リーダーの肖氏



図30 副社長の陳氏



図31 外灘の川辺

出典：「bilibili 動画共有サイト」, 2021.

(2021年11月16日取得, <https://www.bilibili.com/video/BV1Du411f7hS?pv=1>).

店は上海の発展を見守り、上海に溶け込み、上海と建築の物語を語り続けている」と短く括った(図31)。

## 4. クラウドツーリズムの事例分析

### 4-1. クラウドツーリズムの分類

「第32回上海観光フェスティバル」の初日(一部)の事例を分析すると、そこにはいくつかの型があることがわかる。司会者および記者たちがクラウド上で「松江・方塔」をはじめ、「広富林文化遺跡」、「沈家祠堂」、「上海油罐芸術中心」、「外滩万国博覧建築群」をライブ配信することで、複数の観光地を効率的に見て回ったような広範囲の行動は、「周遊型」のクラウドツーリズムと呼ぶことができる。

各観光地の現場では、多種多様な知識を身につけることを目的としたコンテンツが用意されていた。たとえば、第一弾でいえば、「松江・方塔園」の詳細な解説を行うために王氏が招かれていた。このよ

うに様々な専門家や研究者を招いて、各観光地の様子を視聴者に配信しながら、関連する知識を詳細に解説する形式が随所で確認できた。このクラウドツーリズムの形式は、「見学型」と名付けることができる。

事前に企画した脚本に基づいて、エピソードを時系列順で、クラウド上で演出し、視聴者の共感を深めつつ、観光を疑似体験させるコンテンツも用意されていた。例えば、記者が伝統的な旗袍(チャイナドレス)を着て登場する演出や、各観光地の住民が物語を語り、ユーザーたちに提供するというものである。このクラウドツーリズムの形式は、「物語型」と呼ぶことができる。

そして、「小红书」のプロガーや旅行プロガーといったインフルエンサーを起用したコンテンツも見られた。これは、上海政府に属する各観光地の知名度を強化したり、誘客したりすることはもとより、自国民や他国民に対して中国の実力や理念、近代の成果、経済力などを示すことを目的とするクラウド

ツーリズムの形式で、「宣伝型」と呼びうるものである。

以上のようなクラウドツーリズムの4類型を実行するにあたって、「文字」、「音声」、「写真」、「動画」、「QRコード」が活用されていた。例えば、第1弾の王安憶（中国の小説家）と第5弾の宋琳（現代詩人）の文章に関する字幕や図を生成・放映しながら朗読することは、「文字」、「音声」、「写真」の活用である。また、第2弾と第4弾を行う中で、AR技術を用いてCGを合成する仮想空間の映像や、第3弾の現代上海の映像が流れたことは「動画」の活用である。そして、「玩転申城（申城で楽しめる）」という「WeChat公式アカウント」を開設したことにより、専用のQRコードをスマートフォンで読み取ると、ネットユーザー向けの観光地情報を簡単に収集できることは、「QRコード」の活用である。

以上のように「第32回上海観光フェスティバル」の初日（一部）のコンテンツを分析した結果、クラウドツーリズムは「周遊型」、「見学型」、「物語型」、「宣伝型」の4つに分類できることが明らかとなった。これらのクラウドツーリズムを実現するために、「文字」、「音声」、「写真」、「動画」、「QRコード」が用いられていたことも確認できた。これらの型や道具を、単独で用いるのではなく、複合的に用いて構築されていたのが、クラウドツーリズムとしての「第32回上海観光フェスティバル」であった。

#### 4-2. クラウドツーリズムの特徴

「第32回上海観光フェスティバル」の初日（一部）の事例から、クラウドツーリズムの特徴をいくつか見出すことができる。今回のイベントでは、COVID-19の拡大により自宅待機中の国民に余暇や文化、教育といったコンテンツが無料で配信された。ここには〈公益性〉があると考えられる。VR技術を用いて鳥瞰図の形で上海市現地に立体的な仮想空間を作り出したことで高い臨場感を与えた事例などからは、クラウドツーリズムには〈迫真性〉が重視されていることがわかる。地理的に離れた多数のユーザーが時間的・距離的な制約に縛られず、ネットワークさえあれば、「いつでも」、「どこでも」、自由に参加・視聴できるという点からは、〈利便性〉があるといえる。そして、上海市文化観光局と上海市商務委員会という公的な機関が共催したこ

とにより、国民大衆に娯楽コンテンツを提供すると同時に、中央および地方政府に属する各観光地の知名度の強化や、中国政策の優位性、環境保護の理念などを国民に提示したことから、クラウドツーリズムには〈宣伝性〉も備わっていることがわかる。

すなわち、〈公益性〉、〈迫真性〉、〈利便性〉、〈宣伝性〉が、「第32回上海観光フェスティバル」の初日（一部）のクラウドツーリズムの特徴である。

#### おわりに

本稿では、中国におけるクラウドツーリズムに関する先行研究を概観した。その上で、「第32回上海観光フェスティバル」の初日（一部）のコンテンツの事例を取り上げ、分析した。そこから、クラウドツーリズムの4つの分類と、4つの特徴を明らかにした。

最後に、本稿で残された課題を確認する。本稿では、「第32回上海観光フェスティバル」の全ての事例の検討を行うことはできなかった。そのため、ここで提示した以外の分類や特徴もあると考えられる。それだけではなく、こうしたクラウドツーリズムは観光と呼べるのか、これまでの観光研究の中にどのように位置づけることができるのか、クラウドツーリズムにおける観光地とネットユーザーとの双方向性とはいかなるものかといった点についても、さらなる検討が必要である。本稿はそうした研究への手がかりとなるべく書かれた研究ノートである。

#### 謝辞

本稿の作成にあたり、終始熱心にご指導頂いた櫻井悟史先生に深く感謝いたします。また、本稿の趣旨を理解し快く協力して下さった、上海市文化観光局の皆様にご心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

#### 注

- 1 内モンゴル大学の観光・経済法学者
- 2 西北大学経済管理学院の観光・経済学者
- 3 江蘇第二師範学院都市・資源環境学院の観光・資源科学・文化学者
- 4 済南大学の観光・経済学者
- 5 中国伝媒大学のメディア・政治・観光学者
- 6 索は中国海洋大学の観光・経済学者、王元倫は中国海洋大学の経済・文化学者である。

- 7 広東培正学院管理学院の人文社会学者
- 8 王惠敏は西北大学の経営情報システム学者、尚は西北大学の金融学者、馬は西北大学の応用数学学者である。
- 9 嚴、頼、傅は、福建農林大学経済管理学院の観光経済学者、黄は福建工科大学インターネット経貿学院の経済学者である。
- 10 陝西科学技術大学の経営学者
- 11 小紅書 (RED) とは、Instagram と Amazon が合体したような SNS 型 EC アプリケーションである。
- 12 市レベル重点文物保護単位は、中国の文化遺産保護制度の一つである。具体的には、国家レベル、省レベル、市レベル、県レベルの四段階があり、特に国家レベルのものを「全国重点文物保護単位」と称する。

#### 参考文献

- 中国文化観光部, 2020, 「2019年の観光市場の基本的な状況」, (2021年11月12日取得, [https://www.mct.gov.cn/whzx/whyw/202003/t20200310\\_851786.htm](https://www.mct.gov.cn/whzx/whyw/202003/t20200310_851786.htm)).
- 中国政府網, 2020, 「國務院常務會議(2020年11月18日)」, (2021年10月30日取得, <http://www.gov.cn/guowuyuan/cwhy/20201118c38/index.htm>).
- 央広網, 2021, 「接待游客2642万人次 第32届上海旅游节大盘点来了」, (2021年11月15日取得, [http://www.cnr.cn/shanghai/gstjshanghai/20211007/t20211007\\_525625904.shtml](http://www.cnr.cn/shanghai/gstjshanghai/20211007/t20211007_525625904.shtml)).
- 魏宇, 2011, 「慢旅游与云旅游的对接——新型自由行与半自由行旅游模式的构建」『中国外資』16: 117.
- 郭靖・郝索, 2012, 「云旅游视角下的现代乡村旅游发展策略研究」『西安郵電学院ジャーナル』17(5):108.
- 顔敏, 2015, 「云旅游基础上的森林旅游信息化开发研究」『江蘇第二師範学院ジャーナル』31(9): 8-11.
- 陳虎・郭飛・王穎超, 2020, 「云旅游: 曇花一現, 还是大有可为? ——基于对新冠肺炎疫情的讨论」『人文天下』4:89-92.
- 王宇, 2020, 「云旅游会成为“旅行+”吗?」『現代視聽』4: 86.

- 索玲娟・王元倫, 2020, 「后疫情时代旅游景区云旅游模式探析」『人文天下』12: 63-7.
- 王思佳, 2020, 「新冠疫情下“云旅游”的冷思考及热机遇」『三峡大学ジャーナル(人文社会科学版)』42(05): 50-3.
- 王惠敏・尚文媛・馬擘寧, 2021, 「云旅游背景下旅游形象感知研究——以西安为例」『中国商論』14: 51-6.
- 嚴羽爽・頼啓福・傅慶隆・黄傑龍, 2021, 「后疫情时代消费者参与“森林云旅游”的偏好与影响因素分析」『西南林業大学ジャーナル(社会科学)』5(5): 78-83.
- 呉月佳, 2021, 「云旅游模式助力县域旅游发展研究——以商洛市山阳县为例」『商場現代化』6: 176-8.
- 上海市文化観光局, 2021, 「第32回上海観光フェスティバルの「変化と不変」」, (2021年11月16日取得, <https://whlyj.sh.gov.cn/wlyw/20210917/51f0f9c261c2462f80a465642166a855.html>).

## Comment

櫻井 悟史

人間文化学部地域文化学科准教授

郜健斐氏は、クラウドツーリズムについて研究する中国からの留学院生である。日本の観光研究でも、COVID-19以降、クラウドツーリズムへの興味関心は高まっている。たとえば、山田義裕と岡本亮輔が編集する『いま私たちをつなぐもの——拡張現実時代の観光とメディア』（弘文堂、2021年）という書籍に収録されている鈴木謙介の「オンライン・ツーリズムと観光体験」論文では、香川県の琴平バス会社が提供する「オンラインバスツアー」の事例の詳細が取り上げられている。これも興味深い事例ではあるが、「第32回上海観光フェスティバル」の事例と比べてみると、両者の様相はかなり異なっていることがわかる。実は、私が郜氏からクラウドツーリズムの研究をしたいと相談されたとき、念頭にあったのは鈴木が取り上げたような事例であった。そのため、郜氏との議論がどうもうまくかみ合わなかった。そこで、実際にクラウドツーリズムと称して実践されている事例の紹介をして、クラウドツーリズムとはいかなるものか教えてほしいと考え執筆を薦めたのが、この研究ノートである。クラウドツーリズムと聞いて、日本の多くの方は、それがいかなるものなのか、イメージできないのではない

かと思う。しかし、この研究ノートを読めば、おおよその輪郭はつかめることだろう。

ただ、研究ノートの中にもあるとおり、ここではネットユーザーと観光提供者の双方向コミュニケーションの事例が紹介されていないなど、多くの課題がある。そのため、ここで取り上げられた事例が、旅行番組のようなテレビコンテンツとどう違うのかということが分かりづらくなっている。もしも、テレビコンテンツとそれほど違いがないとすると、それでは旅行番組を見ることは観光といえるのだろうかという疑問がたちまち生じる。そこから、はたしてクラウドツーリズムは観光と呼びうるのか、クラウドツーリズムにおける観光体験や移動とはいかなるものなのか、クラウドツーリズムは現地にいかなる影響を与えるのか、異世界への観光もクラウドツーリズムの範疇に入るのかといった疑問が連鎖的に次々と浮かび上がってくる。この研究ノートは、そうしたクラウドツーリズムについての議論をするための土台を提供するものであり、今後の観光研究を拡張していく手がかりとなっている。以上の理由から、観光研究史上の意義があると判断し、掲載可とした。